

[論 文]

幼児の自己主張性と自由遊び場面での コミュニケーションの関連

The Relationship Between Self-Assertion and Communication Skill in Preschool Children

藤 田 文

Fujita Aya

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relationship of the degree of self-assertion of preschool children and the communication skill during free play. The participants were twenty 5-year-old preschool children. First they evaluated their self-assertiveness on the self-regulation scale. Next their behaviors during free play were observed using a video-camera. They were divided into three groups depend on the result of the self-assertion test; high-, middle- and low-assertion group. The main results showed that the children in high self-assertion group demanded or ordered to other children more than those of middle and low self-assertion group. And the children in the middle group expressed their opinion to the group. And when they asked the question to other children, they were responded by others more than those in the high and low group. These findings suggested that the high self-assertion was not always important in the peer group communication.

Key words: self-assertion, communication skill, free play situation, preschool children

【問題と目的】

幼児期には子どもを取り巻く人間関係が、それまでの親子関係を中心としたものから同年齢の仲間関係へと広がりを見せる。従って、この時期には、同じような欲求を持った対等な仲間との関係をうまく調整することが必要になってくる。これまで仲間関係の調整のためには、自己調整能力が重要であることが指摘されてきた。自己調整能力とは、自己の欲求や意志に基づいて自発的に行動を調整する能力 (Thorensen&Mahoney, 1974; 新名, 1991) と定義され、これには二つの側面があるとされる (柏木, 1988; 山崎・白石, 1993)。それは、自分の意志や要求を明確にもち、これを他人や集団の前で表現し主張する自己主張性と、集団場面での自分の意志や要求を抑制・制止しなければならない時、これを抑制する自己抑制性である。

柏木(1988)はこのような自己主張性と自己抑制性が、幼児期においてどのように発達の変化を示すのかを検討した。その結果、自己抑制性が加齢にともない順調に増加するのに対して、自己主張性は年少時期では上昇するものの5歳前後で頭打ちになり、年長児では自己主張が減少する傾向を示した。この結果は、日本と欧米の文化的比較により考察されている。

つまり、日本では欧米と比較して母親の発達期待が自己主張性よりも自己抑制性を重要視する傾向があり、そのために自己抑制性の方が促進されやすいと解釈されている。しかし、母親の発達期待だけが自己主張性の発達に影響を及ぼしているとは考えにくい。幼児の仲間関係の調整にとって自己主張性が、どういった場面でどの程度必要なのかという点に関してさらに検討が必要だと考えられる。そこで、本研究では、自己主張性に焦点をあてて、自己主張性と仲間関係の調整の関連について検討する。

自己主張性は、さまざまな場面で仲間関係の調整との関連が示されている。友川・山田(1999)の研究では、3歳児から5歳児を対象に、自己調整能力とパズル構成課題の共同作業場面でのコミュニケーションとの関連が検討された。この研究では、二者関係の共同作業中の発話数と行動量に関連していたのは、自己抑制能力ではなく主に自己主張能力であり、自己主張能力が高い方が発話数と行動量が多いという結果が得られている。

また、伊藤・丸山・山崎(1999)の研究では、5歳児を対象に自己調整能力と向社会的行動との関連が検討された。その結果、自己主張性が高く自己抑制性も高い子どもは自発的な向社会的行動が多いことが示されている。これにより、自己主張性は、他者に近づいたり援助の申し出をしたりするのに必要な能力であり、自発的な向社会的行動に重要な影響を及ぼしていることが示唆されている。

さらに、藤田(2003)の研究では、4、5歳児を対象に三者関係の魚釣りゲーム場面で交代行動がどのように発達するかが検討された。この研究では、交代行動がうまくいくためには、順番を待つという自己抑制性が重要であると仮定された。確かに、相手が釣っている場合に、順番を待てる自己抑制性は必要であった。ところが、5歳児よりもむしろ4歳児の方が相手が魚を釣っている間長時間じっと待っている場合が観察され、ただ自己抑制的に順番を待っているだけではスムーズに交代が行われなことが示された。従って、5歳児のようにスムーズに公平に三者が交代するためには、自己抑制性だけでなく、自分の順番を相手に主張する自己主張能力が重要だということが指摘された。これらの研究から、確かに自己主張性が高いことは、協力・援助場面や遊び場面における仲間関係の調整に自発的行動という点で必要であることが示唆される。

しかし、その一方で、伊藤ら(1999)の研究で、同じ自己主張性は高い子どもであっても自己抑制性が低い子どもは、他者からの援助依頼が少ないことが示されている。また、藤田(2003)の結果を検証するために藤田(2006)では、3歳児から5歳児を対象に、魚釣りゲーム場面で自己主張高群と自己主張低群の交代行動が比較された。その結果、交代行動に関してはどの年齢においても両群に大きな違いはみられなかった。つまり、自己主張性高群のみが必ずしもうまく仲間関係を調整し交代行動をスムーズに行うとは限らないことが示された。さらに、鈴木(2005)の研究では、6歳児は、自己主張すると認知されている状況においても、実際には自己主張しないことが多いことが示された。これは、大人との相互作用の場面ではあったが、6歳児が実際の状況では相手への配慮や状況を考慮して自己主張の程度を調整したと考えられる。

これらのことから、自己主張性が高いことが、現実のさまざまな場面においては、必ずしもうまく機能しているとは限らないといえるだろう。つまり、仲間関係を調整する際に自己主張性が高ければ高いほどよいというわけではないのではないだろうか。自己主張し過ぎない適度な中程度の自己主張が、さまざまな状況においてより集団的な仲間関係を調整しやすいのではないかと考えられる。仲間関係の中での葛藤場面では確かに自己主張性が必要だろ

うが、特に自由遊び場面での通常の状態では常に自己主張するというよりも集団全体を考慮した中程度の主張的なコミュニケーションが重要な役割を果たすと考えられる。しかし、これまでの研究では、自己主張性が高いか低いかで比較した研究が多く、中程度の自己主張性については検討されていない。そこで、本研究では、自己主張性の程度を詳細に検討するために、幼児の自己主張性を高・中・低の三段階に分類し、自由遊び場面でのコミュニケーションの違いについて比較検討することを目的とする。

Hazenら(1989)や姜(2003)は、幼児のコミュニケーションスキルを働きかけスキルと応答スキルという側面から検討している。特に、姜(2003)では、働きかけスキルを相手からの返事を必要とするものと相手からの返事を必要としないものに分類して検討している。相手からの返事が必要な働きかけは働きかける相手が明確であるが、返事が不要でない働きかけは自分や不特定多数に向けた働きかけである。自己主張性による働きかけの違いを考えると、自己主張高群は相手が明確であり相手からの返事が必要な明確なコミュニケーションをとるが、自己主張中群は不特定多数に向けた集団への働きかけが多いのではないかと予想される。そこで、本研究では、第一に自己主張性によって相手への働きかけがどのように異なっているかを検討する。

また、相手への働きかけが相手にうまく伝わっているかどうかについても検討する必要がある。自発的な働きかけが多いとしても、それが相手から応答されなければコミュニケーションがうまくいっているとはいえないといえよう。従って、本研究では、第二に、相手への働きかけが相手から応答されているかどうかについても検討する。もともと相手からの返事が必要な働きかけに応答されているのかどうか、また、相手からの返事は必要としていないが相手からの応答があるのかどうか、それが自己主張性によって異なるのかどうかについて分析する。従来の研究で示されているように年長児で自己主張性の発達が緩やかになる(柏木,1988)ことを考えると、自由遊び場面では、必ずしも強い自己主張は必要なく、むしろ主張が強すぎで相手からの応答が帰ってこない可能性もあると考えられる。つまり、自己主張性高群は中群に比べて、相手からの応答性が低い場合があると予想される。

以上のことから本研究では、自由遊び場面での幼児の自己主張性と相手への働きかけと相手からの応答性の関連を明らかにすることを目的とする。

【方法】

調査対象者：本研究の調査対象者は、幼稚園年長6歳児の男児11名と女児9名の合計20名だった。この調査対象者は、全員同じクラスだった。

手続き(1) 自己主張性の測定：幼児の自己主張性を測定するために、幼稚園の一室で、一人10分程度の個別調査が実施された。個別調査は、調査者が幼児の仲間関係を反映した場면을提示し、そのときに自己主張するかどうかを幼児に質問する形式で実施された。自己主張性の測定に使用する場面は、伊藤・丸山・山崎(1999)の「自己主張・自己抑制認知評定項目」の中の自己主張に関する部分を参考に作成された。これは、幼稚園での日常生活における仲間関係の場面で、幼児の行動を反映させやすい内容のもので構成されていた。全部で6場面あり、具体的な場面は表1に、図版例は図1に示されている。

質問の手順は以下の通りだった。まず調査者が、「これから、〇〇ちゃん(君)がお友達とどんな風に遊んでいるのか聞きます。いつもどうしているか考えて答えて下さい。」と教示した。そして、遊び場面が描かれた図版を提示し、その状況を説明した。図版の中に登場

する〇〇ちゃん（君）は調査対象者自身とした。次に調査対象者に、各場面で自己主張するかどうかを尋ねた。その場面で主張している図版と主張していない図版を提示し、「こんなとき〇〇ちゃん（君）だったら、『××』と言いますか。それとも言いませんか。」と、2つの図版のうちどちらか一方の図版を選択するように求めた。さらに、選択された回答に関して、「〇〇ちゃん（君）はいつもそう言いますか、時々そう言いますか。」とその程度を大小の丸で表した図版を提示し、どちらかを指でさすように教示した。大きい丸が「いつも言う」、小さい丸が「時々言う」ことを示していると説明した。6場面の提示順序は、調査対象者ごとにランダムであった。

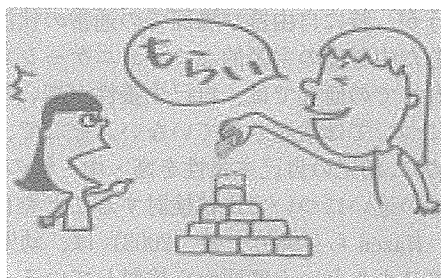


図1 自己主張性測定の図版例
(ブロック場面)

表1 自己主張性を測定する6場面

場面1 鬼ごっこ	近くのお友達が鬼ごっこをしています。〇〇ちゃん(君)も鬼ごっこをしたいと思いました。その時〇〇ちゃん(君)は「仲間に入れて。」と言いますか?それとも言いませんか?
場面2 スコップ	お友達が砂場でスコップを使ってお山を作っていました。〇〇ちゃん(君)もスコップを使いたいと思いました。その時〇〇ちゃん(君)は「貸して。」と言いますか?それとも言いませんか?
場面3 お絵描き	今はお絵かきの時間です。〇〇ちゃん(君)は楽しくお絵かきをしていました。するとそこにお友達がきて、「変な絵。」と言いました。「変な絵。」と言われたら〇〇ちゃん(君)は怒りますか?それとも怒りませんか?
場面4 ブロック	〇〇ちゃん(君)がブロックでお家を作っていました。するとお友達にその時作っていたブロックをとられてしまいました。その時〇〇ちゃん(君)は「返して。」と言いますか?それとも言いませんか?
場面5 積み木	積み木のお城をみんなで作り始めました。今日はどんなお城を作ろうかみんなで話し合っています。〇〇ちゃん(君)は、前から作ってみたいなあと思っていたお城がありました。こんな時〇〇ちゃん(君)は、みんなに「こんなものを作れるよ。」と言いますか?それとも言いませんか?
場面6 ブランコ	〇〇ちゃん(君)はブランコで遊びたいと思って順番を待っていました。そこにお友達がやってきて順番を追い抜かれてしまいました。その時〇〇ちゃん(君)は「ズルイ。」と言いますか?それとも言いませんか?

(2) 自由遊び場面の観察：調査対象者が自由遊び場面において、どのようにコミュニケーションをとっているかを調べるために、観察を実施した。幼稚園を訪問し、園児一人あたり約15分間のビデオ撮影を行った。撮影場面は、午前中の自由遊びの場面であり、撮影場所は教室内、園庭、ホールが含まれていた。撮影時期は、2005年6月から9月であった。

【結果と考察】

(1) 自己主張群の分類

自己主張群を分類するために、自己主張性質問の得点を分析した。自己主張をいつもする場合を4点、時々する場合を3点、あまり主張しない場合を2点、いつも主張しない場合を1点として得点化した。6場面の合計点をその幼児の主張得点とした。この得点が高い方が、自己主張性が高いことを示している。性別・場面別の自己主張得点の平均は表2に示されている。表2より、自己主張得点に男女差はみられなかった。この自己主張得点によって、調査対象者を分類した。男女で得点に差が見られなかったので、男女とも同じ基準で分類を行った。平均点は18点だったので、20点以上を自己主張高群（男児4名、女児3名）、17～19点を自己主張中群（男児3名、女児4名）、16点以下を自己主張低群（男児3名、女児4名）に分類した。以下、高群、中群、低群と省略して記述する。

(2) 自己主張群別の働きかけ回数

自己主張群別の自由遊び場面でのコミュニケーションの違いを検討した。まず、相手への働きかけに違いが見られるのかどうかを分析した。姜（2003）の研究で用いられている相手への働きかけのカテゴリーをもとに調査対象者の行動を分類した。

働きかけの種類は、働きかける相手が明確で返事が必要な働きかけとして「要求・命令・提案」と「質問」、働きかける相手が不明確で返事を特に必要としない働きかけとして「自分への情報提供・意思表示」と「不特定他児への情報提供・意思表示」に分類された。

「自分への情報提供・意思表示」とは、独り言に近い発話であり、自分の行動の計画や結果を宣言するような発話である。例として“これよくできたわ”や“これ持っていこう”などがあげられる。「不特定他児への情報提供・意思表示」とは、その場にいる不特定の他児に対する発話である。例として、“あっ！お皿がないわ！どうしましょう！”や“みんなお姫様よ”などがあげられる。

分析は、15分間のビデオを見ながら各調査対象者の発話をすべて書きとって行われた。上記の働きかけのカテゴリーに当てはまる発話を、一文を一回としてカウントし、各調査対象者の働きかけ数を算出した。

「自分への情報提供・意思表示」と「不特定他児への意思表示」の分類は、発話内容とビデオの行動（視線や身体の向きや態度など）から、自分へ向けられたものか不特定他児に向けられた働きかけなのかを区別するように行われた。これらの働きかけの種類分類は、幼児の発話内容とその場の状況から判断して行った。

各調査対象者の全発話中の各カテゴリー数の割合を算出し、主張群別にその割合を平均して比較した（表3参照）。表3より、高群は、「要求・命令・提案」と「質問」の割合が高かった。中群は、「不特定他児への情報提供・意思表示」の割合が高かった。低群は、「自分への情報提供・意思表示」の割合が高かった。

つまり、自己主張タイプによって、相手への働きかけ方に違いが見られることが示された。

表2 主張性得点の男女別・場面別平均点

	男児	女児	平均
①鬼ごっこ	3.4	3.3	3.3
②積み木	3.2	3.3	3.3
③ブロック	3.0	3.1	3.0
④ブランコ	2.6	3.1	2.9
⑤スコップ	3.1	2.7	2.9
⑥お絵かき	2.9	2.7	2.8
6場面合計	18.1	18.3	18.2

高群は相手が明確であり相手からの返事が必要な明確なコミュニケーションをとるが、中群は不特定多数に向けた集団への働きかけが多いという仮説は支持されたといえよう。高群は、自由遊び場面においても要求や命令などの相手に対する自発的な働きかけが多い傾向にあった。これは、従来の研究でみられるような高群の自発性の高さとも一致する結果であるといえよう。中群については従来ほとんど検討されていなかったが、不特定他児への情報提供が多いことが示された。これは、高群よりも集団を考慮した働きかけともいえるが、相手からの応答を直接的に要求するというよりは、やや間接的に自分の意思を伝えるような形であるともいえる。その点では、やはり高群よりも相手に負荷をかけない形態でコミュニケーションをとっているとも考えられる。

低群は集団的独語と言えるような「自分への情報提供・意思表示」が多く、発話そのものが極端に少ないわけではなく相手に働きかけているようでもあるが、それが明確に相手に伝わるような表現でなかった。このことから、低群は、相手に明確に伝わるような相手への働きかけスキルに未熟さがあるといえよう。

(3) 自己主張群別の相手からの応答の違い

結果(2)のように相手に働きかけた場合、その相手からなんらかの応答が返ってくるかどうかという点に自己主張群で違いが見られるのかを検討した。

結果(2)で分類されたそれぞれの働きかけに対し、応答があるかないかを言語と非言語の両方で分類した。言語的であっても非言語的であっても応答が有るとみなし、言語と非言語を合計して応答有りとした。応答的な発話は一文を一回として、応答的行動は一つの行為を一単位としてカウントし、各調査対象者の発話・行動数を算出した。各働きかけ数に対して、相手に応答された割合を調査対象者ごとに算出した。自己主張群別の平均の応答された割合の結果を表4に示した。

表4より、返事が必要な働きかけでは、「要求・命令・提案」に対する応答率は、高群と中群が高いのに対し、低群は低かった。「質問」に対する応答率は、中群が高いのに対し、高群と低群は低かった。つまり、高群は「要求・命令・提案」は相手から応答されていたが、「質問」は応答されていなかった。中群は「要求・命令・提案」と「質問」の両方において相手から応答されていた。そして、低群はその両方の働きかけに対して相手からの応答は少なかった。

この結果から、高群は中群に比べて相手からの応答性が低い場合があるという仮説が支持された。高群は、明確な相手に端的に要求や命令をする場合は相手から応答されているが、質問をする場合は具体的な説明が少なく端的で口調が強いため相手が答えにくい場合があると考えられる。一方、中群は、質問の内容が具体的で明確であるために相手が応答しやすかったと考えられる。さらに、低群は、相手からの応答が全体的に少なかった。相手が応答を必要としていることを判断しにくいようなコミュニケーションを行っていると考えられる。これらの点については、次のエピソード分析でさらに考察する。

表3 主張群別の働きかけ回数の割合 (%)

働きかけの種類	高群	中群	低群
要求・命令・提案	40	35	22
質問	11	7	5
自分への 情報提供・意思表示	42	40	62
不特定他児への 情報提供・意思表示	6	18	11

また、返事を必要としない働きかけでは、「自分への情報提供・意思表示」に対する被応答率はどの群も低く、「不特定他児への情報提供・意思表示」の被応答率はどの群も高かった。つまり、幼児は発話自体が本人の独り言であると認識した場合は応答をせず、そうでない場合すなわ

表4 自己主張群別の平均被応答率 (%)

働きかけの種類	高群		中群		低群	
	有	無	有	無	有	無
要求・命令・提案	69	31	55	45	46	54
質問	44	56	61	39	33	67
自分への 情報提供・意思表示	4	96	10	90	16	84
不特定他児への 情報提供・意思表示	75	25	82	18	83	17

* 「有」「無」は相手からの応答の有無を示している。

ち、まわりの多くの人や不特定他児に向けられたものには応答していた。幼児は、発話が不特定に向けられたものか、そうでないかを判断し、相手が明確でないような働きかけに対しても集団の中で応答的にコミュニケーションをとっていることが示唆された。

(4) エピソードにみられる自己主張群別のコミュニケーションの特徴

これまでの分析で、自己主張性タイプによって相手への働きかけ方や相手からの応答のされ方が異なることが明らかになった。そこで、各群の調査対象者が具体的にその特徴を示していたエピソードを抽出して、コミュニケーションのパターンを分析した。

まず、自己主張性高群のK夫（自己主張得点22点）とR夫（自己主張得点23点）の例をエピソード1としてあげた。

<エピソード1：自己主張高群>これは、K夫とR夫とその他2人が虫取りをしている場面だった。虫取り網は二人で一本しかなく、K夫とR夫が一緒に行動をしていた。K夫はR夫がなかなか虫を捕まえることができないので、“Rは捕まえれんよ、貸して”と言い、網を奪い取った。その後、R夫も“おったー、貸せー”といって、虫取りをK夫から奪い取った。お互いに“貸せ”や“どいて”や“早く”などの要求を出し、そのつど相手に従いながら相互交渉を行っていた。また、R夫は、K夫が虫取りをしている間も“お前、ばか、逃がすな。”と命令したり、K夫が虫を捕まえたら“ちょーだい、ちょーだい”“みせて、俺に”“○○夫、呼んできて”など他児に対して強く要求したりすることが多く見られた。

また、R夫が、K夫に対して“どこ？”と質問しても、返事は返ってこなかった。K夫が蝶々を捕まえた時、“これ見る、これ見る？”と強い口調で周りにいた3人に質問をしたが、誰からも応答はなかった。

K夫R夫とも、要求は強く明確であるために、相手はその要求に従うことが多かった。しかし、質問に関しては、相手からの応答がなく、会話が途切れてしまうことが見られた。これは、質問の発話自体が短く端的であること、また声が大きく口調が非常に強いことから、相手が質問をされたのか命令されたのか、応答が必要なのかどうか判断しにくく、またそれが自分へ向けられたものなのかも判断しづらかったためだと推察される。このエピソードから、自己主張高群の端的な発話や口調の強さが、相手の応答性を引き出すことを妨げている可能性が示された。

次に、自己主張中群のH子（自己主張得点19点）とM子（自己主張得点17点）の例をエピソード2として、また同じく自己主張中群のN夫（自己主張得点17点）の例をエピソード3としてあげた。

＜エピソード2：自己主張中群＞：これは、H子とM子とその他3人がおままごとをしている場面だった。H子が“今日はおにぎりとお団子にしましょう”や“今日は、特別記念日でケーキを作りましょう”など提案することが多かった。同様にM子も“これは二人で使いましょう”という提案をしていた。それらの提案に対して相互に応答しながらままごとの状況設定を確認しあっていた。

また、H子は“あっ！お皿がないわっ！どうしましょう！！”と不特定他児に呼びかけると、それに応答して周りの子どもたちがお皿を取りに行った。M子は“私は今お味噌を作っているの”や“今、私おいしいのをいっぱい作ってるの”や“あっちに行って作ってくる”というように、不特定他児に自分の行為を説明して伝えていることが多かった。

その後、H子がおたまを探している時に、Y子の前にあるのを見つけて、遠くにいるY子に“Y子！！そのおたま使っちゃん？”と指をさしながら大きな声で質問した。するとY子は“使っちゃんよ”と返事をした。また、砂を何に見立てるかを考えているときに“黒いのはもうだめなの？”とM子に具体的に質問し、M子が“黒いのはお薬とかケーキに使えるからいいの”と応答していた。また、M子は周りにいたY子やA子がひそひそ話をしている状況に気づいて、“あなたなんて言ったの？”や“私のことあんたとか言ったでしょ？”といったように、そばにいるY子に質問していた。それに対してもY子は“何も言ってないわよ”“私のほうが勝つわよ”といったように応答していた。

このように、H子やM子は、提案や不特定他児への情報提供を多く行っていた。その際“～しましょう”という言い方を使い集団を考慮して、みんなに呼びかけていた。このような働きかけに対して相手の子も従うことが多かったようである。また、質問のエピソードからH子やM子は相手の名前を呼びかけることが多く、その発話の対象者が明確であることから、相手は発話の対象が集団に向けてか、個人に向けてなのかがはっきり判断できたと考えられる。さらに、質問の内容が具体的であり、ジェスチャーを使用したり声の大きさを調整したりしていたために、それぞれの場面によって相手からの的確に応答されたのだと推察される。

＜エピソード3：自己主張中群＞：これは、N夫とR夫が二人で何をして遊ぶかを決めようとしている場面だった。N夫は、自己主張高群のR夫が“戦いする？”と質問したら“うん、いいよ”と受容的に応答し、その流れの中で“ここで戦いする？”と質問した。それに対してR夫は“ホール、ホール”と応答した。また、R夫の“これがくわがたのハウスってことにせん？”といった提案に対しても“いいよ”という受容的な応答をしていた。そしてN夫は、自分の遊び道具を持ち“これ、おれの”と自分で確認してから“これ、ちっちゃいよ。R夫のじゃねえん？”と、R夫に質問した。R夫は“やっばおれのや”と明確に応答していた。N夫の質問は、遊びの流れに沿った具体的な内容であり、二人だけの場面だったということもあるが、質問の相手が明確であったために応答されやすかったと考えられる。

エピソード2と3から、自己主張中群は、不特定他児に対する働きかけが多く、集団を考慮していることが示された。また、質問をするときの相手が明確であり、質問内容が遊びや会話の流れに沿った具体的なものであるために、相手からよく応答されていると考えられる。

最後に、自己主張低群のS夫（自己主張得点13点）の例をエピソード4としてあげた。

＜エピソード4：自己主張低群＞：これは、S夫とR夫とその他1人が虫取りをしてい

る場面だった。S夫は、トンボを発見してそれを見て思ったことを独り言のように話していた。例えば、S夫は“飛んだ、飛んだ”や“動きよんよ、足の方が動きよんよ”や“あー落ちた”など発話した。それに対して、他の3人は何の反応も示さず、それぞれの行動をし続けていた。このように、S夫は自分への情報提供が多かった。

また、S夫が虫を入れる箱を探していて“箱は？R夫、箱は？”と質問した。しかし、R夫は無視して虫取りを続けた。その後、S夫は“誰かこれ持って”と要求したり、“誰か捕まえろ”と虫取り網を要求したりした。しかし、これらの要求に対しても他の3人は無視していた。S夫は質問や要求をしても相手からの応答はほとんどなかった。質問の中に“誰か”という言葉があるように、質問する相手が明確でないために、相手も応答できない可能性がある。また、ビデオの様子からS夫は声が小さく、相手を見ないで発話していることが見てとれる。従って、相手に伝わりにくくなったのではないかと考えられる。また、イントネーションが一定であることから、相手はその働きかけが質問なのか独り言なのかを判断しにくいことが原因であると考えられる。

このエピソードから、自己主張低群は、自分への情報提供が多いことが多く、質問や要求を行っても相手からの応答はほとんどないことが示された。発話そのものは少なくないが、質問の相手や発話の相手が不明確で、独り言を言っているように相手から判断されてしまうため応答されにくいのではないかと考えられる。また、声の大きさや相手への視線の向け方や発話のイントネーションなどのコミュニケーションスキルが未熟であり、相手への働きかけとしての機能を果たしていないことが示唆された。

【まとめ】

本研究の目的は、自由遊び場面で、幼児の自己主張性によって相手への働きかけと相手からの応答性に違いが見られるかどうかを比較検討することだった。自己主張性の測定を実施し、自己主張高・中・低の3つのタイプに分類し、自由遊び場面の観察を行った。

その結果、自己主張性によって自由遊び場面でのコミュニケーションに違いがみられた。自己主張高群は、「要求・命令・提案」といった相手への働きかけが多く、そのような働きかけに対する被応答率は高かった。しかし、「質問」の働きかけが他の群に比べて多い割には、被応答率は少なかった。これに対して自己主張中群は、「不特定他児への情報提供・意思表示」の働きかけが多かった。また、高群に比べると「質問」の働きかけは少なかったが、被応答率は高かった。自己主張低群は、「自分への情報提供・意思表示」が多く、働きかけというよりも独り言とみなされる発話が多かった。また被応答率は、他の群に比べると全体的に低かった。

これらの結果から、高群は、相手が明確で相手からの応答が必要であり明確で直接的なコミュニケーションをとっていることが示された。しかし、質問内容が具体的でなく端的で、口調が強いため、相手は応答が必要なのか判断しづらく答えづらい場合があると考えられる。これに対して中群は、集団を考慮したと考えられるもしくはやや間接的なコミュニケーションをとっていることが示された。また、中群は、質問するときに相手が明確になるように名前を呼びかけており、また、質問の内容も具体性の高いものであり、応答されやすかったと考えられる。さらに、ジェスチャーを使用したり声の大きさを調整したりして、相手が応答しやすいようなコミュニケーションスキルをとっていた。そのため、相手も質問が自分に向けられていると明確に判断でき、高い応答率につながったと考えられる。

低群は、集団的独語が多く、エピソードを見ると、相手に視線を向けずに発話しており、イントネーションが一定であり、「誰か」というように働きかける相手も不明確であることから、相手は応答が必要なのかを判断しにくいために応答されなかったのではないかと考えられる。このことから、低群の全体的な相手に伝えるためのコミュニケーションスキルの未熟さが明らかになった。

以上のように、自己主張性ごとの自由遊び場面でのコミュニケーションの違いが示された。従来の研究では、葛藤場面や協力場面などでは自己主張性が高い方が発話数が多く、自分の意思を明確に表現して相手とうまくコミュニケーションがとれるのではないかと考えられていた。しかし、本研究で自己主張性を高・中・低に分類して比較すると、高群よりも中群の方が集団を考慮した働きかけや、相手から応答されるようなコミュニケーションを行っているということが明らかになった。よって、自己主張性が高ければ、それに伴い必ずしもコミュニケーション能力も高いというわけではないといえよう。特に、自由遊び場面では、中群のように集団や相手を考慮した適度な主張をすることが重要であることが示唆された。

しかし、本研究では観察時間と調査対象者の人数が不十分であった。また、自由遊び場面の観察であったため多様な状況でのコミュニケーションが分析対象となっており、状況要因が相手への働きかけに影響を与えている可能性も高い。今後、観察時間と調査対象者を増やし、自己主張高群と中群の違いをさらに明確にしていくことが必要である。

【引用文献】

- 藤田 文 2003 幼児の三者関係における交代行動の発達 日本教育心理学会第45回大会, 20.
- 藤田 文 2006 幼児の自己主張性と交代行動の関連 日本発達心理学会第17回大会, 444.
- Hazen, N.L., & Black, B. 1989 Preschool peer communication skills: The role of social status and interaction context. *Child Development*, 60, 867-876.
- 伊藤順子・丸山(山本)愛子・山崎 晃 1999 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動の関連 教育心理学研究, 47, 160-169.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 新名理恵 1991 子どもの自己制御の発達: 古畑和孝(編) 社会的行動の発達 学芸図書 91-106.
- 姜 信善 2003 幼児の仲間に対するコミュニケーション・スキルと社会的行動特徴との関係 心理学研究, 73, 449-456.
- 鈴木亜由美 2005 幼児の対人場面における自己調整機能の発達: 実験課題と仮想課題を用いた自己抑制行動と自己主張行動の検討 発達心理学研究, 16, 193-195.
- Thorensen, C. & Mahomey, M.J. 1974 Behavioral self-control. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- 友川歩美・山田麻美子 1999 共同作業場面における幼児の行動調整機能について 大分大学教育学部幼児学科・幼年教育コース第24回卒業論文抄録, 22, 26-30.
- 山崎 晃・白石敏行 1993 幼児の自己実現を自己主張と自己抑制から捉える 保育学研究, 31, 104-112.

【付 記】

本研究の実験および調査にご協力してくださった別府市内幼稚園の園長先生をはじめ、職員の先生方、園児の皆様どうもありがとうございました。また、本研究の実施にあたって、大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科実習助手の吉賀夕子さん、同短期大学平成17年度卒業生の後藤澄江さん、橋本奈々さん、前田絵梨さん、松岡由華さん、三浦千絵美さんにお手伝いいただきました。ここに記して心から感謝致します。

尚、本研究は平成17年・18年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号17530498の補助を受けた。また、本研究の一部は、日本教育心理学会48回総会で発表された。